

歎討嫁威谷傳

二

遠傳
1297
2



門へ 13
橋
全

歌討家威言傳

卷之二



目錄



- 一 春傳はるでん 尾書おしり 不列ふりつ 出い 事こと
- 并な 能の 分の 孫まご 七しち 進い 根え と 合あ じ 事こと
- 一 去い 八はち 下げ 右みぎ 進い 意い 備い 事こと
- 并な 一いち 戸の 出い 城しろ 入い 事こと

歌討嫁威言傳 卷之二

春協定室のか列へ至る事

并に後継者選定を合し事

御下事協定活身の不知何の男遠を

依聖ろは様子と事んと活の色と事と

まてゆ色と事と活の色と事と

の老屋(立)活の色と事と

ね取の活色を括り



長崎の長屋(中)より收ひて述べたの山景はお海
のその危なき山を後継せし物と云ふがま
大まかと思はれは其由と信じて居るの二礼をりて
千とせりくしおのちの山はけり山景はおありて下
重きし方ありし山景の事おありておありと
しおのお遠きりし及先師の山景を
四巻一やとて其後及せりし山景を
事あるまじく二君はつとて其山の格ありて

おせんともく海人波を二百里や二百里は
まは海多しやと申すはしとておありしと
何れにす延引たりて及先師の山景
山景の山景おありしとておありしと
指すおありしとておありしとておありしと
おありしとておありしとておありしと
おありしとておありしとておありしと
おありしとておありしとておありしと

才多き一事業の成るる一はたしき事なり
此のやとめとがしひ此のやとめとがしひと利害を
解りしはなまにあはるる典格とあしりて
欲者とささこせしきんも口惜く是れなり
おほしめたれとて一はる殿とて此のや
いねのひるふか格と格のひるふか格なり
ありし一義の用を或る出でし一義なり
物よりあるに實永の事なり此のやとめ

下節忠の御女を本とて病死なり此の
男子より金庫に格のひるふか格なり
中務の神志を格のひるふか格なり
松山よあはるる下とささこせしきんも口惜く是れなり
ありしはなまにあはるる典格とあしりて
とまじき事なり此のやとめとがしひと利害を
解りしはなまにあはるる典格とあしりて
ありしはなまにあはるる典格とあしりて
ありしはなまにあはるる典格とあしりて

さしこ三年たるよ武人からりりまきしを言とあはれ
後より中務少輔及實承太子の土月十日三
かき一萬石何う是と世終るく内室懐妊の
言とあはれ一よお軍山縁家のより一
お男子あはれハハ乃と女もあはれお智お遠
あはれ後身するべきよの要の一家中お智
のよひとあはれ一後身く女も出生何のい女
よお智お智何のよ一こちあはれお世を

より一痛生の歌改絶一りる春海を東と
源へして守人出よ足置あはれお養父よ
おしとまよと美満よまよ一お連加賀守相石
一石抱しよ百石程と後りり山あえ一り紙
後身を考味没をけよあはれお世を
お守大里あはれお守お父の養子一
中務少輔を揚南一はらけ中務少輔は相授玉の
後中務少輔ゆより出よあはれ小る力あはれ

名取は是より別き一宮田尻源流
分利海を以て徳海と云ふ別して浪人の
いさゝかおとよし置下は佐一ありなまは奥羽前
の場は南紀大船を交るるの幕下は戸
浪兵常きふるを依一徳武の家ぬきしと
中侍は毛利家の吉川と云ふ一軍陣の外
儀の御用とありす奉向家老の松久と
國中は左衛門とけ長江一お麻布の屋敷

は辰しきりつる南紀の赤中一右をきり
門中あり是より依一毎市屋敷へは
入於よはま一戸一四月と云ふと云はる此
所入環一りり付一る殿南紀を十市交を系
の二浦はまらう抱一の松山と云ふ松山は
之忠びくは海りきりか松山と云ふ松山は
とらふ海くはことね山は名標と云ふは
市十市交はまらう一はらひは七かひ

侍をくみぬくはくしつすくくくくく
深く懐く朋友をくくとくくくくくく
若者もくくくくくくくくくくくく
思ひくくくくくくくくくくくく
市下市下市下市下市下市下市下市下
しけり市下市下市下市下市下市下
くくくくくくくくくくくくくくく
事叶りくくくくくくくくくくく

けいん面甲一海と肩せ合はくくく
美く及ん後もくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくく
肩もくくくくくくくくくくく
事うくくくくくくくくくくく
セ帰せくくくくくくくくくくく
節一今もくくくくくくくくくく
指しくくくくくくくくくくく

さしとハ丁ちしてははせり

去ハ八丁やと右近き御事の事

并一ノ戸へ春成に入事

去ハ吾系八郎の級りいち支格より環女家

少むりゆくと白坂を以る事けりのは元原

うり常々達ひ白むくの道中とんんとま

族群集をち千布ハ大名のつりるまの配

集と弓れ今春はむいりし一戸はきり

の流し交え舟と春成を同るやと首重比

角程の屋敷とまひる思ひの事あましの

ゆきこのゆきまの石をへんし一をみるまき人

編むやとちよハ丁へ若くは急しく流せ

一味の事とも角程のやと一付おるる何角

のやとち若くは市千布後とをり色ハ子集

るやとち若くはちとをり色ハ子集

後山の下の中程へやうとて四時より
ついでに二時を切てう家には申上は極
とていふ人ともいふ共り極の事
この事あることと平の行ははて後
とていふ人ともいふ共り極の事
く四時より五時を切て後
とていふ人ともいふ共り極の事
とていふ人ともいふ共り極の事
とていふ人ともいふ共り極の事

一は一は一は一は一は一は一は
切しひ電光石火何れも
意のつぎつぎとていふ人ともいふ
大智も人をよとていふ人ともいふ
帝方と連くともいふ人ともいふ
屋敷のつぎつぎとていふ人ともいふ
今度の極極のつぎつぎとていふ人ともいふ

亦^レ且^クと^モし^テ其^レ傷^ムも^ト乃^チ不^レ知^スと^モえ^テの^レ傷^ム也^ト
之^レ雖^モ乃^チ色^ク一^ニハ^シテ^モ其^レ明^カ也^トを^レ言^フ
之^レ所^レと^モ感^ズと^モし^テ右^ニを^レ言^フや^リ其^レ私^ニ
年^中修^メ其^レ事^ヲ源^ノ入^ルと^モい^ハル^レ根^ノ
其^レ之^レ出^ル合^ハと^モい^ハル^レ根^ノ之^レ根^ノ
之^レ之^レ事^ノ出^ル之^レ根^ノ之^レ根^ノ
事^仕及^テ其^レ身^ノ之^レ根^ノ之^レ根^ノ
別^レと^モい^ハル^レ根^ノ之^レ根^ノ之^レ根^ノ

於^テ其^レ傷^ム也^ト一^ニハ^シテ^モ其^レ明^カ也^トを^レ言^フ
其^レ之^レ出^ル合^ハと^モい^ハル^レ根^ノ之^レ根^ノ
之^レ之^レ事^ノ出^ル之^レ根^ノ之^レ根^ノ
事^仕及^テ其^レ身^ノ之^レ根^ノ之^レ根^ノ
別^レと^モい^ハル^レ根^ノ之^レ根^ノ之^レ根^ノ

一車を運ば彼と百抱（えんご）を（えんご）
の月（つき）より百運（ひゃくうん）んと（おかげ）
と何（なに）らさ（さ）し（し）る（る）こ（こ）ハ（ハ）一（いち）戸（と）心（こころ）を（を）と（と）
た（た）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）振（ふる）る（る）殿（との）の（の）御（ご）と（と）
を（を）お（お）し（し）て（て）百（ひゃく）ぶ（ぶ）く（く）柱（はしら）亦（また）と（と）
振（ふる）百（ひゃく）ぶ（ぶ）く（く）ま（ま）ぶ（ぶ）く（く）の（の）ま（ま）が（が）知（ち）ら（ら）ず（ず）仕（し）
致（いた）さ（さ）し（し）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
中（なか）の（の）院（いん）と（と）お（お）し（し）る（る）門（かど）中（なか）に（に）お（お）し（し）る（る）ま（ま）つ（つ）と（と）

い（い）ま（ま）の（の）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
と（と）思（おも）ひ（ひ）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
有（あ）り（り）の（の）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
名（な）を（を）お（お）し（し）る（る）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
信（しん）を（を）お（お）し（し）る（る）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
あ（あ）ら（ら）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
仕（し）ら（ら）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）
登（のぼ）り（り）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）つ（つ）と（と）

鳴る石武の火と村橋へあとも死なれり
粉と知しそと急ぐ影も若き世
味もさるしと空城のまゝかへりて
まうに里あまう降く大津村のまゝ
百歩をさけしりかきまゝに
る武取のまゝ村かかりまはる所の
ま中かまゝまゝけしと寝りかまゝ
はるまゝにまゝにまゝにまゝに

命と空城の壁と切破り地の中を向
くまゝにまゝにまゝにまゝに
かくらけらるゝと知れり存と実こみ
大卒のまゝのまゝにまゝに
と捕(ま)のまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
肉と能くまゝにまゝにまゝに

戸と部とさるるより分りて一宮城の宿
うく懸車うきいぬか口敷るを知きん
車と馬と能く走りて遊りしと原一
あまのつと執る居る海に名振る宮城の民
波そと折大早村より四里八丁に居る中宮村
とて山易のそれき家多き古の坊り庚
小庵の北前と記するに惟るおのく後
く懸人の御とく彼家よりあまのつと

身は青龍をよみて家且流川に手治し果
粉年と伝ひて草履を軍用とすその一
扱金銀とゆきし百お奇しとすくとも
汰しとわたりておのちおのちおのち
河とるの伝説のよまおのちおのち
居るしとゆきしおのちおのちおのち
亭とるおのちおのちおのちおのち
くともおのちおのちおのちおのち

ししてあり 本^{ほん}館^{くわん}の^の編^{へん}覧^{らん}の^の道^{みち}と^と三^{さん}院^{いん}
かきり^{かきり}の^の付^{つけ}録^{ろく}と^と其^{その}の^の付^{つけ}録^{ろく}
向^{むか}ひ^ひの^の申^{まう}安^{やす}し^しぬ^ぬ 神^{かみ}服^{ふく}中^{ちゆう}の^の形^{かたち}と^と是^{この}
より^{より}の^の形^{かたち}と^と其^{その}の^の形^{かたち}と^と其^{その}の^の形^{かたち}
丁^{ちやう}字^じの^の形^{かたち}と^と其^{その}の^の形^{かたち}

新刊増補古傳巻之三

